## 『米百俵』のストーリー

敗戦国となった長岡藩の窮状を見かねて、長岡藩の支藩である三根山藩（表高一万一千石）から、長岡藩士へお見舞いの百俵の米がおくられてきました。その経緯は先述のとおりです。

ところが、長岡藩士たちが待てど暮らせど、百俵の米が手元に回ってこない。そのうち、その百俵の米をもとにして、学校を建てるという話が出てきました。

『米百俵』によれば、貧乏藩士たちは憤激し、その計画の張本人である小林虎三郎の家に押しかけてきます。そして「おまえを斬るぞ」と刀を抜いて虎三郎を脅かします。

これに対して虎三郎は「斬るのは一向に構わないが、しかし話だけは聞け」と言って、藩士たちに諄々と説きます。

「この百俵を長岡藩士全員で分けたらどうなるんだ。家の戸数は千七百、その家族全員では八千五百人もいる。そうすると一人当たり四合か五合しかない。それだけで食いつなげるのは二、三



日だろう。そのあとはまた腹っ空かしの生活が始まるんだ。いま二、三日白い米が食えればそれでいいのか。そういうのを〝その日暮らし〟と言うんだぞ」と言います。

『米百俵』の中に二回〝その日暮らし〟という言葉が使われています。これはキーワードだと思います。「今日飛行機が要るから、早くそれをつくれ、早く食料を増産しろ」というのは〝その日暮らし〟の政治のやりかただ、国家の政策や民族の生き方が〝その日暮らし〟ではいけない、ということですね。

虎三郎は「自分の食うことばかりを考えていたのでは、長岡はいつになっても立ち直らない。貴公らが本当に食えるようにはならないのだ。だからおれは、この百俵の米をもとにして、学校を立てたいのだ。演武場を起こしたいのだ。学校を立て、道場を設けて、子どもをしたてあげてゆきたいのだ。

この百俵は、今でこそただの百俵だが、後年には一万俵になるか、百万俵になるか、はかり知れないものがある。いや、米だわらなどでは、見積もれない尊いものになるのだ。その日ぐらしでは、長岡は立ちあがれない。あたらしい日本は生まれないぞ。」と言うのです。

そして作られたのが長岡の国漢学校でした。その当時は漢籍による学問が中心であり、虎三郎の意識の中にも「人づくりのための学問」というのが常にありましたから、それを目標にして、まず国漢学校をいうのをつくったのです。これが坂上小学校、そして長岡中学校の母胎です。



そこでは「常在戦場（常に戦場に在り）」という長岡藩の藩訓を大切にして掲げていました。それは、「いま、われわれは戦争に負けて困窮しているが、いま戦場はなくなったと思ってはいけない、われわれは今もなお戦場にあると思えば、米がなくても、ひもじくとも、耐えられる。この百俵が次の世代を、次の日本をつくる糧になるのだ」という思想ですね。

「なぜ長岡がその後、英才、俊才を生んだのか」というと、そのとき百俵の米を消費してしまわないで、それを資金にして新しい時代にむけた「人づくり」の学校をつくったからなのです。ここで長岡藩士の師弟のみならず領民の子どもたちも勉強することができ、長岡藩は人づくりを続けることができました。

その結果、連合艦隊司令長官山本五十六ばかりでなく、長岡からは多くの著名人が出ています。小山正太郎という明治洋画界の中心人物。小金井良精という医学博士、森鷗外の妹がこの人に嫁ぎました。そして「博文館」という明治時代に大変盛んだった出版社の創業者、大橋佐平とか、東大総長になった小野塚喜平次とか、二・二六事件のときの司法大臣の小原直とかが長岡の出身です。駐米大使で、英語がものすごくよく出来た斎藤博も、そうです。

長岡の町は、明治政府によって政治の中心の座を奪われ、県庁も長岡の港町だった新潟に移されてしまうけれど、新潟県の他のどの都市よりも多くの人材を輩出しています。